

# 藤野尚之

第54回全国俳句大会  
秀逸賞を受賞  
迫町光ヶ丘東 昭和11年生まれ

Naoyuki Fujino



「努力してきたことが評価されてうれしい」と笑顔で話す藤野さん。9月8日、第54回全国俳句大会(公益社団法人俳人協会主催)は東京の有楽町朝日ホールで開かれ、最優秀賞である大会賞に次ぐ秀逸賞に選ばれた。受賞は、昨年引き続き二度目。

月12日を表し、雄島は松島町にある芭蕉が訪れた島のこと。雄島の松が、風に吹かれている風景を詠んだ。今大会では「特選以上の入賞」を目標に掲げ、俳句作りを取り組んだ。芭蕉に関連する句を作りたいたいと思い、雄島に出掛けた。松林を歩いていて、松が風に吹かれてざわついていた。それを見た瞬間に句をひらめいた。「これはよくできた」と、上位入賞の期待が膨らんだ。

俳句とは、五・七・五の十七音から成る定型詩。「季語」と呼ばれる季節を表す言葉を含まなければならないというルールがある。大会を主催する俳人協会は、国内に3つある大きな団体の一つ。今大会に1万3214句の投句があり、藤野さんは約40句を投句した。「下手な鉄砲も数撃ちや当る」と、俳句の先輩から言われ多く出すようになった。今ではそれがモットーになって

いる。藤野さんは自然を詠んだ俳句が得意だ。自身の体験を基にしたものが多く、抽象的な表現を避けるようにしている。「聞く人、見た人にもイメージが伝わりやすいように」するためだ。今回受賞した句も、実際に現地に赴き、自然を感じて詠んだものである。俳句を始めたきっかけは、14年ほど前に、友達数人とヨーロッパ旅行したときのこと。友達が俳句を詠み始めた

ので、「大したことないよ」と思い参加。「全然だめ。こんな俳句じゃない」と言われ、悔しかったので俳句を始めた。「人がご飯を食べて元気になるように、句を詠むと元気になる」藤野さんにとって、俳句は人生の友と言える。句の材料はどこにでもあるので、外出するときはペンとメモ帳を欠かさず持ち歩いている。「次は大会賞を取りたい」と、今日も俳句を詠んでいる。

Sota Miura



# 三浦宗大

NPB 12球団ジュニアトーナメント  
楽天イーグルスジュニア選抜選手  
佐沼小6年 迫町錦西

日本野球機構(NPB)とプロ野球12球団が連携し「子どもたちが『プロ野球への夢』という目標をより身近に持てるように」と開催している「NPB 12球団ジュニアトーナメント」。このトーナメントに出場する「楽天イーグルスジュニア」(以下、楽天ジュニア)に佐沼小ジャイアンツに所属する三浦宗大投手が選ばれた。楽天ジュニアは、東北6県、約2万2千人の野球プレーヤーの中から18人を選出。市

内からは、3年前加賀野ジュニアハリケーンの阿部大夢(現仙台育英学園秀光中)以来2人目の選出となる。三浦は「練習後、整理している時に、コーチから伝えられました。そのときは、びっくりして何も言えませんでした」と笑顔で話す。三浦が野球と出会ったのは4歳頃。2歳年上の兄と、自宅駐車場で小さいバット使って遊び始めたのがきっかけ。それからは天気さえ良ければ、近所の友達と野球を楽しんでいた。

本格的に始めたのは小2の時。兄と共に佐沼小ジャイアンツに入った。そこから、めきめきと頭角を現す。持ち前の身体能力で、二塁手のレギュラーの座を小4で勝ち取る。新人メンバーでは、投手として活躍。その後、遊撃手、投手へとポジションを移した。本年度は、投打の柱として獅子奮迅の大活躍。JA共済県大会優勝、県ジャンボ大会

3位、県学童大会、ベスト8入りに貢献。古豪ジャイアンツ復活を県内にアピールした。三浦の売りは最高120km/hの速球と県内トップクラスの制球力。また、小学生離れしたスイングスピードと快速を持ち、投走打三拍子そろったマルチプレーヤーだ。「楽天ジュニアは、選手全員のレベルが高く、プレーしていて楽しいです。でも、ジャイアンツの仲間がいないので、少し寂しい」と仲間思いの一

面を見せる。大会は12月27日から3日間の日程で、宮崎県のサンマリノスタジアム宮崎などを会場にグループリーグと決勝トーナメントで争われる。「ジャイアンツの代表として、頑張ります。目標は、1試合でも多く出場しての優勝です。負けるの大嫌いなんで」強い気持ちを持った心優しい勝負師は、06年からの優勝という、少し早めのお年玉を宮城に持ち帰ってくる。